

# 判

決の行方は分らない。しかし、差別者の卑劣さは鮮明に浮かんた。

DHCテレビジョンの番組「ニユース女子」のデマとヘイトスピーチを問う訴訟は3月17日、東京地裁でヤマ場の尋問があった。

司会だった元『東京新聞』論説副主幹の長谷川幸洋氏、番組の責任者である制作会社ボーイズのプロデューサー一色啓人氏は口をそろえて「被害」を訴えた。「言論

報道の自由を脅かす乱訴だ」という。「どうして訴えられたんでしょうね」と不思議そうにしてみせたところまで同じだった。

加害者に限って被害者のポジションに逃げ込もうとする。私は証言を終えた一色氏に「被害者と認識しているのか」と尋ねたが、一色氏は背を向けて歩き去った。

長谷川氏も、記者だったにもかかわらず、訴訟自体が名誉毀損だとして自ら反訴したにもかかわ

ンのライター、李信恵さんはツイッターに書いた。

この弁護士は辛さんに対して「母国である韓国で基地反対運動をしないのか」とまで言った。植

民地支配の帰結として朝鮮半島出身者が日本で暮らしてきた歴史の事実を無視し、「国に帰れ」と同様のヘイトスピーチを、ヘイトが問われている法廷で吐いた。

結局、差別者が守りたい「表現の自由」というのは「差別する自

ト」と中傷し、辛さんがその資金源、「黒幕」であるかのように名指しした。地上波の影響力は想像以上に大きかった。脅迫が身近に迫った。

心身への打撃は深刻だった。味覚を失い、何度も吐き、眠れず、やつと寝たかと思えば追いかけて回される悪夢に襲われた。2年間、ドイツに逃れざるを得なかった。

訴訟に勝ったところで、差別者が悔い改めることはないと分かっている。万が一負ければ、ヘイトはさらに悪化するだろう。それでも辛さんは提訴に踏み切った。

たまたまひどい番組があったから、ではない。日本社会全体がひどい。差別者たちが大手を振って歩けるひどい差別構造がある。

デマやヘイトを公権力が公認し、後押ししている。沖縄の異議申し立てが外国勢力に操られているかのように描いた番組と同じデマを、公安調査庁や国会議員が唱和している。

辛さんは法廷で、裁判を起こした理由をこう表現した。「きちんと記録しておきたかった。日本の良心が今、どこにあるのか」。

あべ たかし「沖縄タイムス」記者。

※本コラムは望月衣聖子、西川伸一、榎本順一、佐藤甲一、長谷川綾、阿部岳の各氏によるリレー連載となります。

## 阿部岳の 政治時評

### 「ニユース女子」訴訟 差別者の卑劣さ鮮明

らず、報道陣を振り切つて帰ろうとした。「言論の自由のために闘う」と言いながら取材を否定するのはおかしい」と私がただと、声を上げて笑った。何も語らなかつた。

DHCテレビ側の弁護士は笑いながら原告の在日コリアン辛淑玉さんを尋問した。辛さんが「生きるために声を上げている」と証言すると、また嘲笑した。

「差別者はいつも笑っている」。大阪から傍聴に訪れた在日コリア

由」でしかない。そんなものは、存在しない。差別を娯楽とする多数者のために少数者の表現の自由が奪われ、沈黙を強いられることなど許容されない。

対して、辛さんが守りたいのは、命だ。法律上は名誉毀損を問うことしかできないが、自身と少数者の命を脅かしたデマとヘイトの責任を問うている。

番組は沖縄の高江ヘリパッド建設に抗議する市民を「テロリス